

国際高等研究所 研究プロジェクト
「領域横断型の生命倫理プラットフォームの形成に向けて」
2017 年度第 2 回 研究会プログラム

「予防の倫理を考える—公衆衛生と警察行政の倫理」

日 時：2018 年 2 月 10 日(土) 10:00～18:00
2 月 11 日(日) 9:00～16:00

場 所：けいはんな国際高等研究所

目 的：公衆衛生では傷病予防、警察行政では犯罪予防と、両者は予防という共通の発想を持つ。また、自殺の問題など、公衆衛生と警察行政が共通に関心を持つテーマも存在する。

本ワークショップでは、両者に共通の倫理的課題を探るとともに、今後の両分野の研究者の交流を深めることを目的とする。

出席者：(17 人)

研究代表者 児玉 聡 京都大学大学院文学研究科 准教授

参加研究者（プロジェクトメンバー）

齋藤 信也	岡山大学大学院保健学研究科 教授
佐藤 恵子	京都大学医学部附属病院 特定准教授
長尾 式子	北里大学看護学部看護システム学 准教授
三成 寿作	京都大学 iPS 細胞研究所 上廣倫理研究部門 特定准教授
鶴山 竜昭	京都大学大学院医学研究科 准教授
服部 高宏	京都大学法学系（大学法学研究科）教授
東島 仁	山口大学国際総合科学部 講師

話題提供者（ゲストスピーカー）

島田 貴仁	科学警察研究所 犯罪行動科学部 犯罪予防研究室長
中谷 友樹	立命館大学文学部 地域研究学域教授 立命館大学 歴史都市防災研究所副所長
村山 綾	近畿大学 国際学部 国際学科（グローバル専攻）講師
山本 功	淑徳大学 コミュニティ政策学部 教授

近藤 尚己	東京大学大学院医学系研究科 公共健康医学専攻 健康教育・社会学分野 准教授
高木 大資	東京大学大学院 医学系研究科 公共健康医学専攻 保健社会行動学分野 講師
齋藤 知範	科学警察研究所 犯罪行動科学部 犯罪予防研究室 主任研究官

その他参加者 (RA)

大庭 弘継	京都大学大学院文学研究科 研究員
立場 貴文	京都大学大学院文学研究科 修士課程

プログラム

2月10日(土) 10:00～18:00

10:00～10:30 趣旨説明 (児玉聡)・自己紹介

セッション1 座長：児玉聡

10:30～11:20 島田貴仁：リスクとしての犯罪—その特徴から犯罪予防のあり方を考える

11:20～12:10 中谷友樹：犯罪予防と傷病予防への地理学的アプローチがもたらす問題

12:10～13:30 昼食・記念撮影

セッション2 座長：島田貴仁

13:30～14:20 児玉聡：公衆衛生と警察行政の倫理

14:20～15:10 齋藤信也：公衆衛生と医療倫理 ——臨床医の立場から——

15:30～16:20 村山綾：犯罪被害者・加害者に対する一般市民の反応：公正世界信念に基づく検討

16:20～17:10 山本功：地域社会とのつながりが自殺許容意識にもたらす効果の分析

17:20～18:00 総合討論

18:30～ 意見交換会

2月11日(日) 9:00-16:00

9:00～9:20 自己紹介

セッション3 座長：児玉聡

9:20～10:10 佐藤恵子：高齢者の孤独と孤立を防ぐために

10:10～11:00 齋藤知範：万引きを行う高齢者の社会的背景の特徴

11:10～12:00 鶴山竜昭：日本における法医学サンプルの研究利用をめぐる
倫理的問題

12:00～13:30 昼食・記念撮影

セッション4 座長：中谷友樹

13:30～14:20 高木大資：コミュニティにおける犯罪予防とその副産物的課題

14:20～15:10 近藤尚己：日本の健康格差の現状と対策：社会行動科学アプローチの
倫理的課題は何か

15:20～15:50 総合討論

15:50～16:00 閉会の挨拶

発表概要

2月10日(土)

「リスクとしての犯罪——その特徴から犯罪予防のあり方を考える」

島田貴仁 科学警察研究所 犯罪行動科学部 犯罪予防研究室長

犯罪予防は、刑事司法による事後対応に比べて有利な点が多々あるもの、日本では十分に受容されているとはいえない。

本発表では、リスクとしての犯罪の特徴を、疾病や自然災害など他のリスク源と比較した後に、現状の犯罪予防をめぐる課題を子供女性の安全対策や情報発信など1次・2次予防を中心に述べる。

「犯罪予防と傷病予防への地理学的アプローチがもたらす問題」

中谷友樹 立命館大学文学部 地域研究学域教授 立命館大学 歴史都市防災研究所副所長

健康増進と犯罪予防のいずれの活動においても、地理的な情報の利用が進んでいる。しかし、地理的な健康水準や犯罪発生に関する詳細な情報は、その情報を活用する意義が提起される一方で、特定の個人や地域の不利益をもたらしことも懸念されている。両分野での詳細な地理情報の活用とそれによって生じる不利益への技術的対策、社会的課題を整理したい。

「公衆衛生と警察行政の倫理：両者の歴史、個人の自由とパターンリズムの問題」

児玉聡 京都大学大学院文学研究科准教授

近代公衆衛生行政および近年の予防を重視した警察行政の共通の問題として、個人および社会の安全を守るためにどこまで個人の自由を制約してよいかという問題がある。本報告では、両者の歴史にも簡単に触れつつ、自由と安全の対立という問題について倫理的な分析を行なう。

「公衆衛生と医療倫理——臨床医の立場から——」

齋藤信也 岡山大学大学院保健学研究科教授

自己決定権を根本原理とする医療倫理を信奉する医師が、功利主義的な公衆衛生も同時に担う困難について検討する。

「犯罪被害者・加害者に対する一般市民の反応：公正世界信念に基づく検討」

村山綾 近畿大学 国際学部 国際学科（グローバル専攻）講師

人はその人にふさわしいものを手にしているという信念が、被害者非難や加害者の非人間化につながるプロセスについて紹介する。

「地域社会とのつながりが自殺許容意識にもたらす効果の分析」

山本功 淑徳大学 コミュニティ政策学部 教授

自己本位的自殺というデュルケムの命題をブレイクダウンし、地域社会とのつながりが自殺許容態度にどのような効果をもたらすかを分析する。

2月11日（日）

「高齢者の孤独と孤立を防ぐために」

佐藤恵子 京都大学医学部附属病院特定准教授

認知症の妻の介護をしていた夫が妻を殺害するといった事件の背景の一つとして、患者や介護者が孤立していることが指摘されている。英国などでは、孤独は空腹と同じであり放置すれば死ぬ **epidemic** であり、公衆衛生上の問題として適切に対応する必要があることを認識し、対策を立てている。日本も今後独居の高齢者が増加することが予想され、実効のある対策が必要と思われる。

「万引きを行う高齢者の社会的背景の特徴」

齋藤知範 科学警察研究所 犯罪行動科学部 犯罪予防研究室 主任研究官

万引きを行う高齢者を対象として、暮らしぶり、孤立等の観点から考察し、支援のあり方を考える。

「日本における法医学サンプルの研究利用をめぐる倫理的問題」

鶴山竜昭 京都大学大学院医学研究科准教授

近年、多くの国で医学研究における被験者保護の観点からヒト試料の使用を規制する倫理的制度が確立されてきている。このプレゼンテーションでは、法医学サンプルを研究リソースとして使用する際の独自の倫理問題について検討する。剖検の実施のために患者の親族のインフォームドコンセントを前提とした臨床病理学的剖検とは異なり、法医学剖検はそうではなく、得られたサンプルを研究利用することに制約がある。実際の法医学的研究を分類し、研究利用における倫理的課題を考察し、研究利用の基準を提案したい。

「コミュニティにおける犯罪予防とその副産物的課題」

高木大資 東京大学大学院 医学系研究科 公共健康医学専攻 保健社会行動学分野 講師

地域や職場などコミュニティの社会関係と犯罪予防の関連についていくつかの研究・事例を紹介し、そこに内在する倫理的問題および適切な予防・介入のあり方を検討する。

「日本の健康格差の現状と対策：社会行動科学アプローチの倫理的課題は何か」

近藤尚己 東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻 健康教育・社会学分野 准教授

近年の健康格差の動向に関するデータおよび、地域環境デザインやナッジ、マーケティングといった行動科学的手法による健康格差是正のための取り組みについて紹介したのち、その倫理的な課題について議論します。